

景德鎮紀行 2012

鈴木 裕子

(俳四門 文化財研究室)

江戸遺跡を業とする者にとって中国の磁都景德鎮はまだ遠い存在であるように思われるが、幸いにも筆者は今年（2012年）の2月に訪れる機会を得たので、ここに景德鎮の現状の紹介をしておきたい。

今回の旅程は2泊3日で（全日程では5泊6日）、上海経由の空路で江西省の省都南昌へ。南昌から車で景德鎮へ、景德鎮周辺は車で移動、帰路は景德鎮からまた空路で上海へと戻った。参加メンバーは藤掛泰尚氏・堀内秀樹氏・水本和美氏と筆者の4名、ガイドはベテランの宋小凡氏である。

2月18日（土）曇 前夜上海から南昌に到着し1泊する。午前中は江西省博物館へ向かう。中国の博物館はどこもそうであるが、建物が大きく中はガランとしていて寒い。時間がまだ早いせいか見学者はちらほらみえるだけである。ここでは殷周春秋戦国時代の灰陶・黒陶から漢時代の緑釉陶、五代の青磁、宋代の吉州窯（窯跡出土資料。吉州窯は江西省中部にある）等の種々の製品は、地方色をあまり感じさせない（専門外なので詳述はできないが）。青白磁や染付は小皿・中皿・瓶・壺類が充実しているが、これらは墓の副葬品であるとのこと（写真1）。

この日の午後は3時間かけて、車で景德鎮に移動。南昌市の東側にある瀟陽湖の南を回り込み、景德鎮まで約200kmの道のりである。国土の面積は日本の25倍強、人口は約10倍あっても車外に続くのは山と川、田んぼと畑でその中に時々集落がみられる。日本国内と同じような風景が現れては過ぎてゆく。農民の移動手段は水牛に引かせる車が主である。トラクターやトラックはほとんどみかけなかった。まだ明るい午後5時半にはホテルに到着。

景德鎮は江西省の北端に位置する人口160万人弱の地方都市である（中国の地方都市は日本の地方都市とひとけた違う）。北隣は安徽省、東側は懷玉山を越えれば浙江省、南は武夷山山脈を福建省との境とする。景德鎮の市街地はその西側を縦断するように昌江が北から南へと流れてはいるが、後述するように明末清初期の表面採集資料や窯跡が発見されているのは、昌江の東岸域の旧市街である（図1）。

2月19日（日）晴 ホテルの7階から眺める景德鎮の町並みは、西の方に数本の高い煙突と白煙をあげる大規模な工場群がみえる。今朝まず訪れたのは景德鎮古窯民俗博覧区である。ここには復元した景德鎮陶業を実演する工房址がある。入り口前のモニュメントは窯跡から持って来たと思われる匣鉢や熔着資料が積み上げられている（写真2）。日本人には意表をつく発想でびっくりである。復元された作業場で碗を作る手順を見学する。ロクロは木の長い棒で勢いをつけて回す。ロクロが回転している間に手早く成形を行なう（写真3）。糸切りで切り離した半製品は板の上に並べて乾燥した後に再びロクロに乗せて、高台周囲と高台内を削り出す（写真4）。写真5は外面に釉薬を漬け掛けしている様子である。左手には長い柄の先に釣針型に曲がった針金がついており、釉薬内にある碗の高台内を支えているので、器を引き上げるのは容易である。職人たちは見学者が来ると実演してくれる。皆に日本でいえば伝統工芸士級のベテランの方々である。景德鎮の陶業は上記の作

業が分業で行なわれている所に特徴があるという。製品の製造過程だけでなく、原材料の採掘からはじまり、窯焚きまで明末期の『天工開物』によれば、72の作業工程に分かれていたという。景德鎮ならではの分業体制といえるかもしれない。

この後民俗博覧区では復元された窯や祖師廟を見学し、昌江東側の旧市街地、珠山中路と中山北路が交わる近くにある景德鎮市陶瓷考古研究所へ江建新氏を訪ねた。研究所は景観保存地区内にあり、古い民家そのまま施設として使われていた。四周が部屋で囲まれ、中央に屋根のない空間が広がっている。僅かな展示スペースには明時代後期（16世紀）の染付が並べられていた。文京区本郷の東京大学構内だけでもかなりの数の景德鎮産磁器が出土しているとの話題が出ると少しびっくりされた様子ではあった。江氏は景德鎮の官窯発掘を精力的に進めた劉新園氏の下で官窯の調査に携わってこられた方である。明末清初期の民窯製品が日本で出土するのは意外ではないのかもしれないが、具体的な数字を聞くのは初めてだったのではないかと。

研究所の表通り側（珠山中路北側）が景德鎮御窯（ぎょよう）遺址である（註1）。「御窯廠」の額の掲げられた門を入り、御窯廠の頃からあった井戸や御窯廠の復元模型、調査保存された窯跡を見学する。景德鎮は1004年（北宋の景德元年）に時の皇帝から元号を頂き、景德鎮と改称した。それから1000年後の2004年は、景德鎮命名千年祭が大々的に開催され、街中も大きく変貌したという。街路灯は染付のタイルの支柱になり、薪窯はガス窯へと替わった（実は私は10年位前に一度景德鎮を訪れたことがあるが、その時と比べると煙突の数がかなり減ったというのが今回の印象だった）。御窯廠の発掘もこれに連動してのことであったと思われる。御窯は文献史料からは明代初期の1369年（洪武2）に創建され、清朝滅亡（1911年）に至る約550年の間稼働し続けた。保存されている窯は数基あったが、いずれも明代中～後期（15・16世紀）の饅頭形窯である（写真6）。窯壁は磚積みで、焚口前庭は焚口に向けて逆「ハ」の字形に窄まるものの、焼成室から煙道部にかけての幅は拡大されて、全体の平面形は方形となる。焼成室は1室である。燃焼部と焼成室には高さ50～60cmの段があるのが日本の窯との違いである。煙道部隔壁の下部には5、6箇所の排煙孔がみられる。窯の規模は全長4m・全幅2m前後である（北京大学考古文博学院他 2005）。図2は『天工開物』掲載の景德鎮の磁器窯である。地上の窯体構造はこのようなものであったと想像される。世界中に貿易陶磁として出回る景德鎮の製品の量からすると窯の規模は意外と小さい（註2）。

御窯廠から中華北路を北へ行き、次は龍珠閣（景德鎮官窯博物館）へ。5層の塔を模した建物であるが、中には御窯から発掘された明代初期（15世紀前半）の染付製品を中心にした展示がされている。この時期の口径40～50cm級の大皿や、壺・水注等の大型製品が並ぶ中に2個の把手を並行して付けた小壺形や横倒しの円柱形の上方に2箇所の口が開く鳥の餌入れがあった。これは江戸で出土する鳥の餌入れの遡るタイプであろう（写真7）。最上階からは景德鎮の町並みがよく見通せた（写真9）。やはり煙突の数は少なく、遠方はマンションの建築ラッシュである。旧市街の建物が新しくなっているというより、郊外へ市街地が拡大しているという風に見受けられた。

昼食後は、景德鎮陶瓷博物館へ。午前に訪問した場所の東方の市外にあたる。景德鎮千年祭までは景德鎮唯一の陶磁器の歴史を展示する博物館であった。五代～清代までの展示を中心に見学する。

次は市街地東方郊外の景德鎮民窯博物館へ向かう。以前は湖田窯古瓷遺址と呼ばれ、窯跡と工房跡が保存されていたが、現在は道路向かい側に博物館が新設された。湖田窯跡は1970年代に既に発掘調査されていた著

名な窯跡である。工房跡は小さいものは1m以下～2、3mの規模の長方形の枳形の掘り込みが切り合って検出されている(写真9)。構築材の切石製は通例としても、匣鉢を積み上げているのは景德鎮ならではである。これらは元代の釉薬漕との説明書きがあった。ここではまた窯跡も保存されている。御器廠で保存されている窯とはやや構造が違い、焼成室から煙道部にかけての床面には傾斜がついており、燃焼室から焼成室は全幅が広がるが、煙道部は幅が狭くなる。写真10は、窄まった焚口(中央、右側が焼成室)と、急激に広がる燃焼室と隔壁である。全長5、6mはありそうである。このタイプの窯の方が、饅頭形窯より古手の年代があたえられている(北京大学考古文博学院他2005)。

既に4時半を過ぎたが、景德鎮陶瓷学院に曹建文氏を訪ねる。曹氏は江戸の遺跡の調査では、明末清初期の景德鎮産の磁器が出土すると伝えると、熱心に聞き入っていた。実は曹氏は2004年に中国の研究者で初めて景德鎮で古染付を採集されて、その紹介文を書かれていた。採集地点は図1に星印で記載したが(曹2004)、いずれも景德鎮の旧市街地にあたっており、市街地の再開発時に発見されたものである。これらの古染付製品の資料紹介文は2011年に『陶説』でも翻訳が掲載された。現在学院内には展示室があり、採集資料を見学することができる(写真11・12)。古染付の変形向付、四方形や筒形の茶碗があるし、「呉祥瑞五良大夫」銘の小皿(写真11右)もみられた。また「倣呉祥瑞製所嘉慶年製」銘(嘉慶は西暦1796～1820年)の碗もあり、これらの祥瑞模倣製品は、文様の様式や元号から18世紀末～19世紀初めの年代と特定されるという。17世紀前葉が生産年代とされる祥瑞タイプの製品の出土はいまだないものの、祥瑞模倣製品の生産地側の動きがつかめつつあることに着目したい(註3)。以前から日本からの注文品が景德鎮で出土しないのは、現在の市街地と窯跡が重複しているためであるともいわれてきたが、言葉通りそれが実証されたことになる。学院の展示室には、明末清初期のヨーロッパ輸出用とされる芙蓉手等のカラックウェアや、清代のヨーロッパ産の銅版転写文を写したウィローパターンの食器もあった。今回の旅で明末清初期の民窯製品に興味をもつ中国の研究者に会えたのは初めてだったので嬉しくなった。堀内氏と、中国の研究者を東京に呼びたいと話してはいたが、その足掛かりになってくれればよいと思う。展示品の中に見込に釘書で文字が掘り込まれているものがあった(写真13。製品の生産年代は18世紀後半～19世紀前葉)。釘書の技法もまた中国から入ってきている可能性があることを指摘しておきたい。

学院を退出したのは6時半、また西の旧市街地へと戻り、市第一人民医院の南に向かう。中華北路から脇へ入ると、レンガ造りの3階建ての大きな建物の下に出た。窓の一部は目張りされて閉鎖されている。残った素通しの窓からは夕餉の煙が立ち上っている(写真14)。ここがかの有名なイエズス会のダントルコールが布教活動をした教会であるという。宋氏によれば窓の上のマークと同じマークがダントルコールの書簡につけられているとのこと。ダントルコールは、1712年と1722年に景德鎮の磁器製作方法をフランス本国へ長編の書簡にして送った。これが『中国陶器見聞録』で、18世紀初めにおける景德鎮の磁器製作法の基礎資料としてつとに有名である(ダントルコール1712・1722)。今、ここに住まわっている人は知ってか知らずか。

今日最後に向かったのは、旧市街北方3kmにある観音閣である。昌江の東側に中山北路に沿うように細長く集落が展開していたが、近々再開発されるようで空家も目立つ。中山北路東側でも西側でも明末清初期の染付の破片は落ちていたが、西側の集落を抜け、昌江の東岸まで来ると、物原が小山状に幾つも連なっていた(写真15)。陽は既に山並みの向こうに沈み、あたりはだんだん暗くなってゆく…。

観音閣でも古染付が採集されており（曹 2001）、1980年代から着目され始め、2007年に遺跡内に数箇所のトレンチが入れられた。その結果15世紀末～17世紀初めの遺構（ロクロピット・埋甕・練泥池等）と遺物（碗が主体）が検出された（北京大学考古文博学院他 2009）。ここでの遺物の成果は、芙蓉手タイプと「天文年造」（「天文」は日本の元号で1532～54年）銘の日本輸出用の木火型小皿、嘉靖期（1521～66年）の御窯製品が出土していたことが挙げられている。

2月20日（月）曇 今日景徳鎮の原材料採掘地点として名高い高嶺（カオリン）山へ出かける。

まずは、市北方に残る浮梁古県衙に到着。景徳鎮は浮梁県に属していたが、その県庁所在地にあたる。浮梁県の歴史が年代を追って描かれる染付タイルでその歴史を勉強しながら、古県衙の門に至る（写真16）。現存する建物は清代の道光年間（1821～50年）に建てられたものとのことであるが、一部の建物は新しく建てられたものようである。

浮梁古県衙から東へ50km。次に訪れたのは瑤里（ようり）古鎮。景観保存地区である。川の脇には洗濯場が設けられている。上流で長靴を洗い、下流で食器を洗っている（写真17）。家はレンガ造りで、道は石敷きだが、狭い（写真18）。住んでいる人には不自由さはあるだろうが、自動車の騒音のない静かな生活がある。

昼食を瑤里の中で食べ、午前中来た道を少し戻り繞南古制瓷遺址区へ。途中道路南側の窯跡に立ち寄る。道路脇の斜面が物原だという。16世紀の碗・皿や匣鉢が散在していた。繞南（ぎょうなん）古制瓷遺址区は東河沿いに窯跡と工房跡が保存・復原されている。自然石で組まれた長方形の土坑群は景徳鎮民窯博物館でも見学済みである。磁石砕石用の水車が復元されていた。数基の杵の先端には河原石がはめ込んであり、水車が回ると腕木がガタンと落ちて、杵が磁石を砕く（写真19・20）。景徳鎮の磁器製作と川の水は切っても切れない関係にあった。砕石場の後方には、水簾した粘土を固めたペイトンツの製作場がある。ペイトンツはレンガ程のサイズである。木の棚にはこの塊が幾つか置かれていた（景徳鎮古窯民俗博覧地区では、この後の作業工程が行われていることになる）。窯跡は3基が発掘されて覆屋が掛けられている。窯はいずれも窯体の長い龍窯である（単室傾斜窯）。写真21の1号龍窯遺址は全長約42m・幅0.7～1.3mで、窯体はやや曲がっている。保存されている窯の中では最も遺存状況がよい。説明板の記述によれば、南宋時代の窯とのことであるが、この時代に染付はまだないはずであるから、水車による砕石が行われていたかどうか…。それはそれとして、江南地方の窯体構造は龍窯タイプとされるが、景徳鎮は饅頭形窯である。どのように窯体構造が推移したのかは今後の研究課題である。この後高嶺山に行く途中で、とある集落の斜面際に構築された龍窯タイプの瓦窯に立ち寄った。近年窯壁が崩れて使用できなくなったそうである。龍窯タイプの窯は現代まで使われている。図3は『天工開物』記載の龍窯である。

瑤里古鎮から高嶺山まで車で約30分。景徳鎮千年祭の時に麓からの道路ができたとのこと。それより以前は4時間をかけて弁当持ちで山登りをしたと宋氏は話していた。カオリンは日本でいえば瀬戸美濃の蛙目（がえろめ）粘土にあたる。カオリン（粘土）を磁石（ペイトンツ）と混合して初めて磁器は焼き上げることができる。磁石は景徳鎮の近辺で比較的入手し易かったが、カオリンは高嶺山中でしか採掘できなかった。山中にはカオリンの採掘坑が幾つか残されている（写真22）。岩脈を掘りあててゆくように、狭く奥深い坑道のような、一人が漸く入れるような穴である。17・18世紀になると露天掘りされるようになるが、この跡も今は草木が覆い尽くしていた。また尾砂堆と呼ばれるカオリンの不要成分（矽石粒）の捨て場も残ってお

り、10 m以上の白い崖となっていた（写真 23）。

高嶺山を下り、東河河畔の東埠の町を橋上から眺める（写真 24）。カオリンはここから積み出され、景德鎮へ運ばれる。この東河は昌江の支流で、昌江とは浮梁県古県衙の南で合流し、昌江はさらに景德鎮の旧市街の西際を流れてゆく。東埠の東河にせり出すような家並みは遊郭の名残であるという。つわものどもが夢の跡の世界である。川は昔日の喧騒を飲み込み、今はただ静かに流れるばかりである。

江戸の遺跡では身近な明末清初期の最新の研究動向を盛り込んでの景德鎮の現状報告をと考えて文を書き記した。明末清初期以降を研究対象としようとする気運が、景德鎮側にあることが確認できたことも大きな成果であった。江戸遺跡での中国陶磁の情報を景德鎮に知らせてゆくことが次のステップになるろう。

註

1. 「御窯」は日本でいうところの「官窯」である。
2. 数年前に実見した河南省の北宋末の官窯青磁を焼いたとされる清涼寺遺跡の窯跡は、1基の規模は全長 1.5 m×全幅 1 m弱と非常に小型の窯であった。
3. 曹 2004 によれば、「五良太甫吳祥瑞製」銘の康熙年間（1662～1722）の様式の碗も出土しているとのことで、祥瑞タイプが日本からの注文品であるならば、17 世紀後半～18 世紀初めと 18 世紀末～19 世紀初めに注文が行われた可能性がある。

引用・参考文献

- 宋応星撰 1637 藝内清訳注 1969 『天工開物』東洋文庫 平凡社
- ダントルコール 1712・22 小林市太郎訳注 佐藤雅彦補注 1972 『中国陶瓷見聞録』東洋文庫 平凡社
- 曹建文 2004 「近年来景德鎮窯址発現のクラク瓷」『中国古陶瓷研究第 10 輯』紫禁城出版社所収。小林仁訳 2011 「景德鎮窯址で近年発見された古染付及び祥瑞について」『陶説 701』所収
- 北京大学考古文博学院・江西省文物考古研究所・景德鎮市陶瓷考古研究所 2005 「江西景德鎮明清御窯遺址 2004 的発掘」『考古 2005 - 7』所収。金沢陽訳 2006 「江西景德鎮明清御窯遺址における 2004 年の成果」『出光美術館館報 134』所収
- 北京大学考古文博学院・江西省文物考古研究所・景德鎮市陶瓷考古研究所 2009 「江西景德鎮観音閣明代窯址発掘簡報」『文物 2009 - 12』所収。金沢陽訳 2010 「江西省景德鎮観音閣明代窯址発掘簡報」『出光美術館館報 153』所収
- 地球の歩き方編集室編 2011 『広州・アモイ・桂林 2011-12』ダイヤモンド社